

ふるさとの
文化財探訪

カッコウと民話

文化財調査員 阿部 秀幸

九重町の鳥はカッコウであるところ存じの方は多いと思います。町民憲章ではカッコウを「緑の中心で聞くカッコウの鳴き声は静寂で、情感を漂わせ、無垢の聖域を連想させます。」

カッコウにはホオジロやモズといった他の鳥の巣に自分の卵を産み、その巣の親鳥に自分のヒナを育てさせる「托卵」という習性があります。カッコウの卵は仮親の卵よりも早く孵化し、仮親の卵をすべて捨ててしまいます。そして仮親が運んで来るエサを独占して成長するので、こう聞くとカッコウはずいぶんひどい鳥だと思われるかもしれませんが、なぜ托卵をするのでしょうか。カッコウは体温を一定に保つ能力が低く、これが托卵の理由だという説があります。多くの鳥は親が卵をあたたためてヒナをかえますが、体温変動が大きいカッコウは、うまく卵をあたたためられず、他の鳥に卵を託したほうがヒナが育ちやすいのではないかということです。托卵はされる側にとってはとんでもない話ですが、カッコウはカッコウで、生まれた瞬間から親子が離れ離れになるといふ悲しい宿命を背負っています。

言えるのかもしれませんが。カッコウが九重町の鳥に指定された理由の一つに「九重町に古くから伝わるカッコウの民話がある」ということもあったようです。その民話とはカッコウは継母にいじめられて鳥になった娘の姿であるというものです。大まかに紹介しましょう。

「実子と継子の姉妹がそれぞれ背負いきれないほどの山菜を収穫して家についた。母は実子にはねぎらいの言葉とご褒美を与える一方、継子には働きが足りないといふ厳しい仕置きをした。継子はたまらず外へ飛び出し、「かっば、かっば」と母を呼んで空へ舞い上がった。春の野山を「カッコウ、カッコウ」と鳴きながら飛んでいるのは、この娘の化身であるという」

先人たちはカッコウをひどい鳥ではなく、悲しい鳥だと見ていたということかもしれません。

このように古くからの言い伝えや歴史的な遺物などからは、我々が何に関心を持ち、どのようにとらえていたのかを伺うことができます。このよ



九重町の鳥・カッコウ

幸せになろうね



No.305

2021年度 第4回なるほど“ザ”人権講座

今年度最後となる第4回目の「なるほど“ザ”人権講座」が11月4日に開催されました。

第4回講座は、『人権学習は誰のため?～「寝た子は起こすな」でいいのか～』と題して、大分県人権・部落差別解消教育研究協議会事務局の足立哲範さんを講師にお迎えし講話をして頂きました。

受講生アンケートでは、以下のような記述がみられました。(一部抜粋)

- ・部落問題について常に学習していく必要があると思う。そのことを通じて人権について敏感な人間になりたいと思う。
- ・人とかかわりの中で本当に自分の意識はその人のことを尊重してるのか、と考えるきっかけにな

ると思いました。

- ・4回の講座を聞いてとても勉強になりました。被差別地域の人をかわいそうとか思ったことはありません。そう思う気持ちがあることが差別の始まりだと思う。
- ・今回で終了ですが、まだまだお話をききたいなと思います。講座の回数をふやしてもらとうれしいです。子ども達にも同じようにきかせてあげたいです。

コロナ禍で昨年度は実施出来ず、本年度も講座が延期になるなど難しい中での開催でしたが講師の方や受講生の協力もあり、全4回の講座を終了することが出来ました。

本講座で聞き・知り・感じ、自分なりに色々なことを考えることで「気づき」が受講生一人一人の中で芽吹き、「人権のまちづくり」を進めていく仲間として今後のPTAや地域の中で活躍されることを願っています。

夜に開催される連続講座で参加の難しさはありますが、来年度も多くの方々(特に未受講の方々)の参加を心からお待ちしております。

紙面の都合上、詳細について掲載することができませんが、ご質問等がございましたら、社会教育課(☎76-3823)までお問い合わせください。

九重町教育委員会 社会教育課